(11) 樹幹断面調査

1．A-5樹幹断面の拓本

A-5樹幹は高さ12mのスギ樹幹を展示用に切り出したものである。切り出したあとの横断面（切り口）は，樹幹の南西側で旧地表面より173cm上位，東北東側で175cm上位であった。切断位置での幹周は623cmあり，直径は N20° E 方向で208.5cm， N80° W 方向で207cm， N15° W 方向で106.5cmであった。

A-5樹幹は４本の幹が合体したものであり，それぞれの幹にA-5-1，A-5-2，A-5-3，A-5-4と付番（図4-1-7-1）して記述する。横断面で観察する限りでは，A-5-1は約150年でA-5-2と合着し，A-5-3は約150年でA-5-1およびA-5-2と合着している。A-5-4は幹の中心部が朽ちて失われており，最外周部分の年輪が最高97年分残っているだけであるため，他の幹との合着関係は不明である。

A-5-4は横断面の170cm下位でA-5-3と合着しており，A-5-1とは52cm下で合着している。

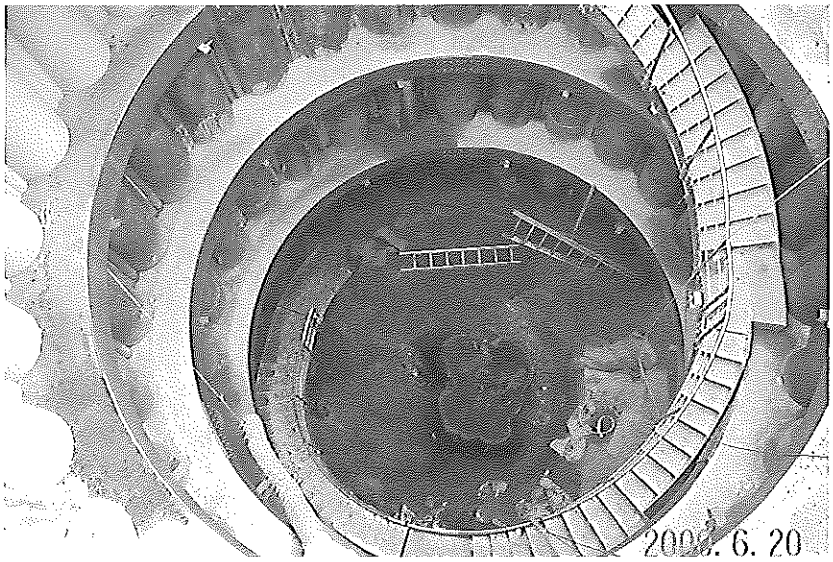

写真4.1.11-1　A-5樹幹（断面）
A-5坑上部より見下ろす。

写真 4.1.11-2 A-5樹幹（切断面より下部）

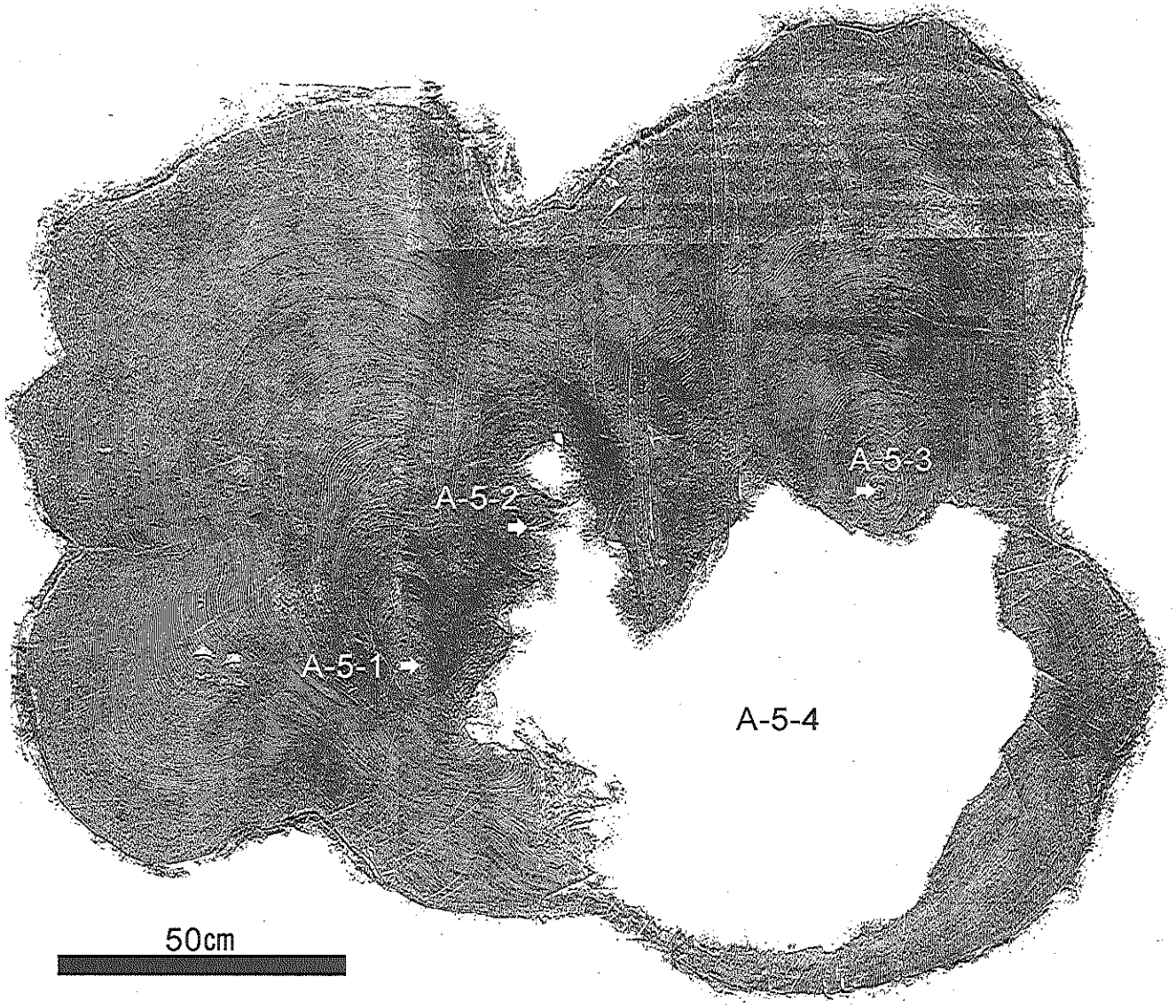

図 4.1.11-1 A-5樹幹断面拓本
A-5-1～4の幹が合体したことがわかる。

2．A-13樹幹断面のスケッチ

A-13樹幹は昭和58年に発見されて一部が切り取られたスギの樹幹であるが，その存在が再度確認されて展示用輪切り標本が採取された。切断部位は旧地表面から約８m上位であろうと推定される。

採取後の横断面は最大直径170cmで，中心近くをほぼ直線的に南北方向に走る大きな割れ目が観察された。またその他に，樹幹の周辺部近くの年輪に調和的に伸びる短い割れ目が少なくとも17例観察された。割れ目は晩材部と早材部の間に形成されているが，４ヶ所で割れ目が年輪を横切って異なる年輪にまで伸びているのが観察された。これらの割れ目は樹幹の北西側から西側にかけての部分には認められなかった。図4.1.11-1は樹幹の切り口にビニールシートを張って直接トレースしたものである。

A-13樹幹の西側および南西側，すなわち下流側には土石流堆積物に包含されるスギの倒木樹幹が多数累積していることが確認されている。A-13樹幹にできた上記の割れ目群は，土石流とそれに押し流されてきた倒木群の衝突によってできた可能性が考えられるが，昭和58年の切り出し時にどの様な力が加えられたのかが不明なため実態は明らかでない。

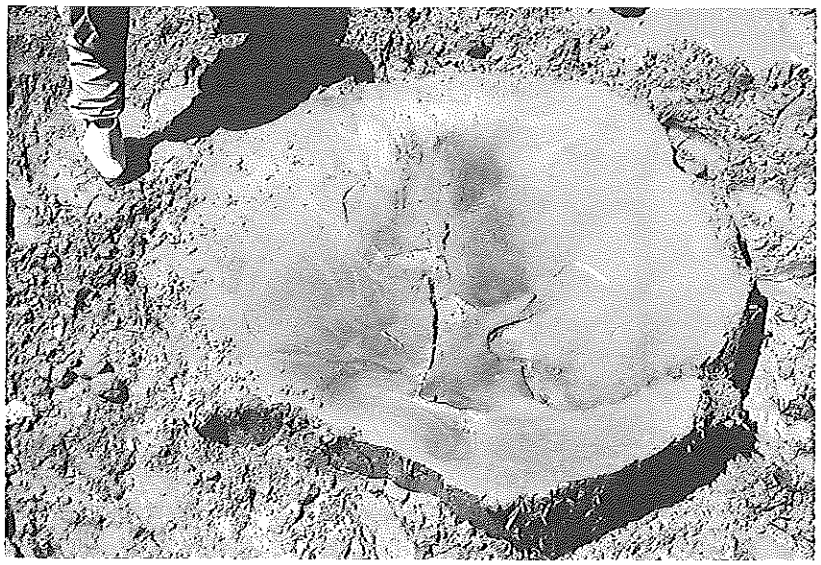

写真 4.1.11-3　A-13 再発見直後のA-13

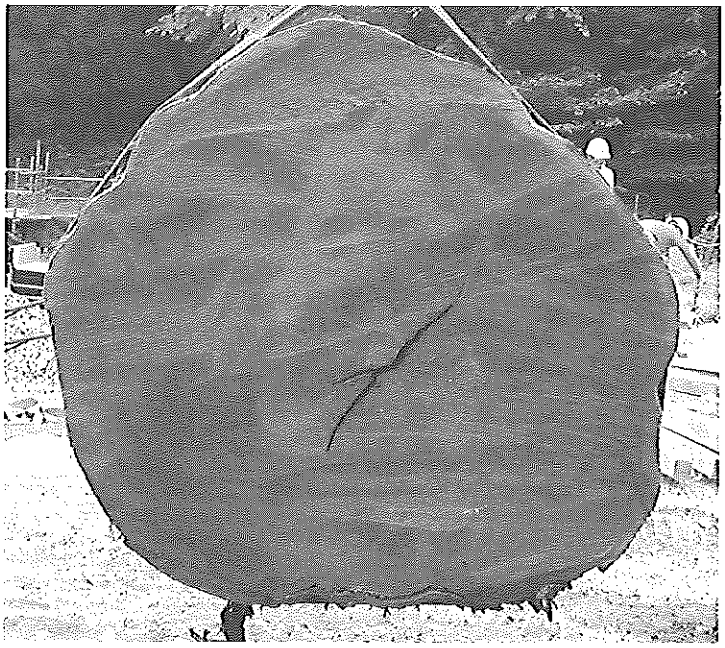

写真 4.1.11-4　A-13樹幹断面

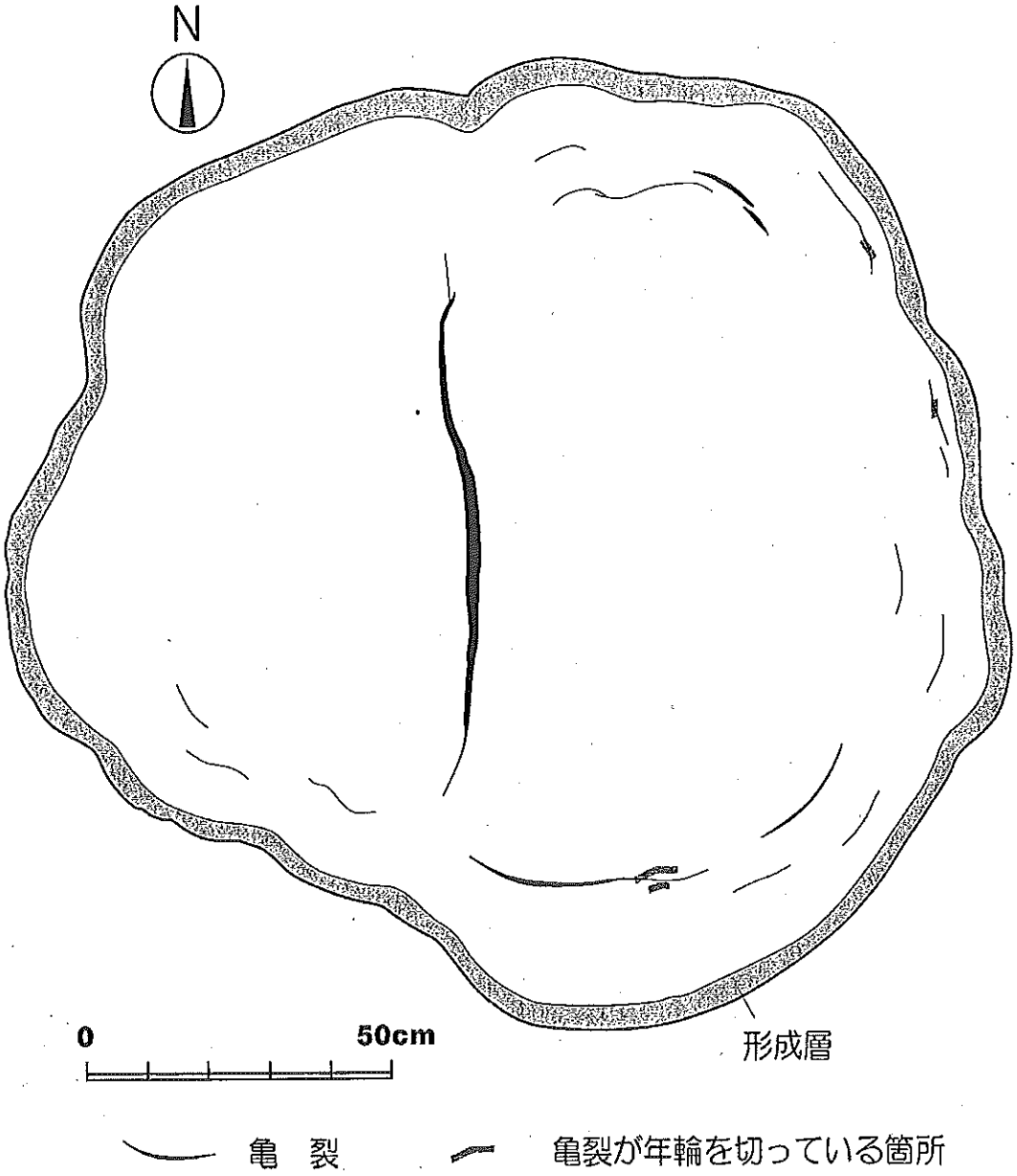

図 4.1.11-2　A-13樹幹断面にみられる亀裂